かわらぐちぼうじゅういせき

河原口坊中遺跡

（海老名市№52 遺跡）

調査期間	20060601～20100215
所在地	海老名市河原口152 他
時　代	弥生 古墳 奈良・平安 中世 近世

作成日：20100405　更新：20120425

概　要

ここで紹介する河原口坊中遺跡の調査は、中日本高速道路株式会社による首都圏中央連絡自動車道(さがみ縦貫道路)建設事業に伴って実施された道路橋脚部分の発掘調査成果です。調査は平成 18 年6月に開始し、平成 22 年2月 15 日に終了しました。整理作業は調査と平行して平成 20 年 12 月に開始し、現在も実施しております。

遺跡は海老名市西部、JR 相模線・小田急小田原線の厚木駅の北西約1km、海老名市河原口にあります。市域の西縁を南流する相模川中流域左岸で、小鮎川・中津川が相模川に合流する三川合流地点の対岸にある、標高 21～22mの沖積微高地

▲　P25　弥生時代中期全景

▲　弥生時代土器集合写真

▲　旧河道出土木器

に立地しています。調査区の北東約 60mに平安時代末から室町時代に活躍し、海老名市の名前の由来にもなったと言われる「海老名」氏の菩提寺「宝樹寺」跡と推定されている墳墓が隣接しています。

調査した橋脚(ピア)は 19 基ですが、それぞれの調査区は 148 ㎡～246 ㎡、おおよそ 12m×12m～14m×17m位のとても狭い範囲です。遺跡からは明治時代に建てられた煉瓦造りの建物から弥生時代の集落まで、様々な時代の遺構・遺物が発見されています。ここで時代毎にその一部を紹介したいと思います。

【弥生時代中期～古墳時代前期】

ピア 19 基中 18 基から 300 軒近い竪穴住居址が発見されました。その8割が弥生時代後期後半の竪穴住居です。多い地区では 40 軒以上重複しており、同じ場所に何度も竪穴住居を作っています。また、方形周溝墓も約 10 基発見されています。調査していない部分を考え合わせると大集落が広がっていたと想像されます。この時期の最大の特徴は旧河道です。一番北側の調査区、中央、そして南側の調査区において調査されています。北側からは弥生時代中期後半の木製品が出土し、中央では古墳時代前期の木製品、南側では弥生時代末～古墳時代初頭の水場遺構が発見されています。時期が微妙に違いますが、狭い調査区の端に検出されているため全容は不明です。また、隣接する河川改修事業の調査地区でも旧河道の調査が行われ、大きな成果を上げています。

【古墳時代後期】

集落は発見されていません。円墳の周溝が9または 10 基と小石室を 12 基調査しました。この時期は墓域だったのでしょうか。小石室から管玉（くだたま）や水晶製切り小玉が出土しています。

【奈良・平安時代】

調査区中央から北側に 25 軒の竪穴住居址が発見されています。南側からはこの時期の遺物がほとんど出土していないことから、集落の中心はもう少し北側にあると推定しています。他に井戸や溝状遺構が調査されました。

【中世】

海老名氏の活躍していた時期ですが、今回の調査では、井戸や溝状遺構以外は発見されてなく、遺物も少量です。活動の痕跡は調査区より北側にあるのでしょうか。

【近世以降】

江戸時代の耕作の跡や井戸が見つかっています。相模川の渡し場に近く集落が広がっていたと推測されます。

【明治～昭和】

明治 20 年代に製作された銅版画が残る煉瓦造りの酒造施設が検出されました。江戸時代後期から続く山田酒造という造り酒屋で、明治時代に海老名村村長になった山田嘉穀氏が建設した事が判明しています。大正時代に大島酒造となり、関東大震災で甚大な被害を受け、煙突などに補修した痕跡が残されています。その後昭和 10 年に廃業しています。また、明治 37 年に廃業した醤油醸造業を営んでいた古川商店の建物2棟が発見されています。古川家も江戸時代から続き、古川謙氏が海老名村村長をしています。山田(大島)酒造、古川商店の施設の調査は、ともに海老名市の近代史を知る上で貴重な資料です。

▲ 絵画土器 「人物」

▲ YH1号木槽

▲ 小石室出土玉類

▲ 酒造施設